エックハルトの異端審問
—教皇庁が恐れたもの—

中　川　憲　次

An Inquisition of Eckhart —What Holy See feared—

Kenji Nakagawa

はじめに

ここでは、マイスター・エックハルト晩年の異端審問に着目し、1329年３月27日付の教皇勅書『主の畑において』を取り上げたい。すなわち、そこで異端とされた命題を検討して、教皇庁がエックハルトの思想の中の何を一体恐れたのかを探りたい。

1　教皇勅書『主の畑において』について

ここでは、教皇勅書『主の畑において』の諸命題の内、第８命題を取り上げたい。何故なら、この命題の中に、教皇庁がエックハルトの思想の中の一体何を恐れたのかを具体的に示すものがあると考えられるからである。

まず、教皇勅書『主の畑において』の第８命題は以下の如し。

「名誉も利益も内的な献身も、聖別も、報いも、天国も、何も求めないで、これらの一切を捨てたもの、自分のものすらも捨てたもの、このような人が神を崇めるのである。」(1)

この命題はエックハルトのドイツ語説教第６番との関連が明白である。ドイツ語説教第６番の該当すると思われる箇所は以下の如し。

「神のものとは栄光である。誰が神に栄光を与えるのであろうか。それは、自分自身を完全に脱却し、自分のものを、いかなるものにも、大きいものであれ、小さいものであれ、何であれ、まったく求めない人、自分の下、自分の上、自分の傍ら、自分の内のいかなるものも見ない人、財、名誉、安楽、快楽、益、内面的瞑想、聖性、報い、天国などに執着しないで、これらのすべてを脱却し、自分自身のすべてを脱却した人である。神はこのような人たちから栄光を受け、このような人たちが神に本当の意味で栄光を与え、神のものを神に捧げるのである」(2)

このドイツ語説教第６番においてエックハルトは、神に栄光を与える人とは「財、名誉、安楽、快楽、益、内面的瞑想、聖性、報い、天国などに執着しないで、これらのすべてを脱却し、自分自身のすべてを脱却した人である」と言っていた。この言葉と同じ響きを持つ言葉は、ドイツ語説教第52番にもある。曰く、

「何も意志せず、何も知らず、何ももたない人、そのような人こそが貧しき人である。」(3)

更に曰く、

「人は、神が働くことのできる場でもなく、また、そのようなどんな場をも持たないほど貧しくなければならないと、わたしたちは言うのである。」(4)

この説教のテキストはマタイによる福音書５章３節の「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」であって、ルカによる福音書６章20節の「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」ではない。まだ神学教育を受ける前、米屋で働いていた私は岩波新書の荒井献著『イエスとその時代』を読んで、当時の新約聖書学の成果としての、「幸いの説教」のマタイ版とルカ版の違いに関する文学社会学的分析の鮮やかさに驚嘆した覚えがある。もちろん、マイスター・エックハルトが現代聖書学の成果を知る由もない。エックハルトはそのような神学的分析とは関係なく、ドイツ語説教第52番において「幸いの説教」のマタイ版をテキストに説教しているのである。それでいながらエックハルトによるマタイ版の「心の貧しいものは幸いである」という言葉の解釈は、ルカ版の「貧しいものはさいわいである」という言葉の解釈を徹底する方向で為されているのである。エックハルトが言うところの「脱却」すべき「すべて」の中には、また、「何ももたない」の「何も」の中には、「内面的瞑想」だけでなく、「財」も「益」も入っているのである。それ故に、ドイツ語説教第52番を突き詰めればドイツ語説教第６番に行き着くのである。そこにおいて際立つのは、内的、外的を超えた徹底的な「貧」である。エックハルトはそれをイエスの生の本質として捉えているのである。このようなイエスの捉え方に基く言説の一体どこに、教皇庁は異端性を見出したのであろうか。教皇庁にとって、エックハルトの言葉の何が不都合だったのであろうか。それを解く鍵は、当時の教皇庁の状況に潜んでいるであろう。

それ故、以下では、エックハルトの弁明の言葉を瞥見した後に、エックハルト当時の教皇庁の状況について見てみたい。

2　エックハルトの弁明の言葉

異端審問の過程で為されたエックハルトのいくつかの弁明については、これまでの拙論においても引用したことがあるが、ここでも瞥見しておきたい。

まず、1326年９月26日の弁明において、エックハルト曰く、

「我らがドミニコ会は自由と特権を有し、私はあなたがたの前に立つ必要もなければ、（私に向けられた）非難に答える必要もないのである。ましてや私が異端であるなどと非難されたことはこれまでなかったし、（異端の）うわさが立ったこともなかった。このことは私の全生涯と私の教えが証明するものである。私は全ドミニコ会の兄弟たちの意見、そしてドミニコ会をめぐる男女の民衆の意見と一致している。そのことから、あなたがたが尊い父、ケルン大司教殿（その生は神が保たれますよう）より命じられた任務はなんら効力を持たないということが明らかになる。もとはと言えばつまらない中傷なのだ。よくない根、よくない木から出たものである。私が民衆の間でこれほど評判とならず、これほど正義につくさなかったならば、私を妬む者どもが私にたいして何かしかけようなどという気にはならなかったのだろう。それでも私はこれを堪え忍ぼうと思う。使徒パウロによれば『義のために悩むものは幸いである』、また『神は受け入れる子を懲らしめる』のである。私は詩篇作者とともに『私は懲らしめを受けている』と言おう」。(5)

この弁明書には、更に次のような言葉もある。

「私は間違うことはありうる。しかし、異端ではありえない。なぜなら、前者は知の問題であり、後者は意志の問題であるから（Errare enim possum, hereticus esse non possum, nam primum intellectum pertinet, secundum ad voluntatem）」(6)。

次に1327年１月23日の弁明。

「私、神聖なる神学博士マイスター・エックハルトは神の御前にて宣言する。私はいかなる信仰上の過ちも、いかなる不品行も、なしうるかぎり忌避してきた。このような過ちは私の学問的立場や聖職者としての立場と相容れないものであったし、これからもそうである。よって、この点において私の書物、言葉、説教に何らかの過ちがあるとしたら取り消す。私的であれ、公的であれ、いつなんどきのものでも、直接あるいは間接的な発言でも、誤った見解によるものであれ、倒錯した分別によるものであれ、そのようなものは公式に、ここにお集まりの方々の前で取り消そう。今このときより、私はそれを述べなかったし、書かなかったとみなされたいからである。（中略）。すべて（訂正の）条件を満たすものは、（最初に）述べたように訂正し取り消そう。私は全般的にも、あるいは細部においても、ほかいかなる場合でも、意味内容があまり健全でないということが明らかな場所はそれ（訂正）が有用である場合には、すべて訂正し取り消す。」(7)

こうして、改めてエックハルトの弁明の言葉を読み返してみると、そのドミニコ会修道院長兼神学大学学長でありつつ説教者でもあった人間の、逃げも隠れもしない誠実さが伝わってくる。今しがた引用した1326年９月26日の弁明で、エックハルトは次の様に言っていたではないか。「私が異端であるなどと非難されたことはこれまでなかったし、（異端の）うわさが立ったこともなかった。このことは私の全生涯と私の教えが証明するものである」。そして又、1327年１月23日の弁明書では、次の様に言っていたではないか。「私はいかなる信仰上の過ちも、いかなる不品行も、なしうるかぎり忌避してきた。このような過ちは私の学問的立場や聖職者としての立場と相容れないものであったし、これからもそうである」。エックハルトは自分の語ったことに責任を持とうと心がけた説教者であった。それは、エックハルトを異端と断罪した教皇庁の人間、とりわけヨハネス22世の持ち合わせなかった態度であった。

3　エックハルト当時の教皇庁について

1249年、エックハルトが30代半ばの頃に教皇となったのが、ボニファティウス８世である。その勅書 Unam sanctam の末尾は以下の如し。

「朕は全人類がローマ教皇に服従することが万人の救いのために必要であることを宣言し、教示し、決定し、かつ布告する（Porro subesse Romano Pontifici omni humanae creaturae declaramus, dicimus, diffinimus omnino esse de necessitate salutis.）。」(8)

教皇権が王権に優るとしたこの勅書を否定する出来事が、1303年のアナーニ事件である。すなわち、ボニファティウス８世がフランス王フィリップの顧問官ギヨーム・ド・ノガレ達に逮捕、監禁され、辱められたのである。その後、教皇はかろうじてアナーニ市民に救出されたが、間もなく死ぬことになる。その２年後の1305年にフィリップが擁立したのが、クレメンス５世である。この教皇クレメンス５世が、アヴィニョンに教皇庁を移したのである。いわゆる教皇のアヴィニョン捕囚時代の幕開けである。

クレメンス５世の在位は1305年から1314年までである。1314年と言えば、エックハルトが二度目のパリ大学神学教授の職を終えて、ドミニコ会総長代理としてシュトラースブルクに赴いた年である。エックハルトの迫害前夜とも言うべき時期にアヴィニョンに居たこの教皇は、上述のフランス王フィリップの圧力を受け入れテンプル騎士団を異端として断罪し解散させた教皇でもある。こ

のクレメンス５世がリヨンの近くのヴィエンヌに召集した公会議の決定は、エックハルトが深くかかわっていたベギン会修道女の迫害に根拠を与えていたし、ベギンに関わるエックハルトのような聖職者を激しく糾弾していた。今回、この論文において特に注目したいのは、この教皇が教皇庁の要職の任命にあたって親族や同郷の聖職者を重視したり、教会財政や地位の占有に執着していた点である。そのような特徴は、クレメンス５世の死後、２年の空位の後、1316年にアヴィニョンに住む教皇となったヨハネス22世にも当てはまる。

教皇ヨハネス22世は、特に教会の財産を増やすことに腐心したといわれている。エックハルトはこの教皇の在位中に異端審問を受けたのである。このヨハネス22世が出したのが本発表の冒頭で取り上げた勅書『主の畑において』であった。ここで、ヨハネス22世の財政的執着を示す言葉を1323年11月12日の教皇勅書 cum inter nonnullos から引用したい。

「○聖書の多くの箇所において、彼ら（イエス・キリストと使徒たち）が何かを持っていたと書いてあるのでその反対を主張するものが正当な信仰箇条を証明している聖書に公然と反対する者であって、このような前提は虚偽の酵素を含んでいる。したがって、信仰を完全に空しいものとし、カトリック信仰を疑わしいもの、不確実なものとしてしまう。このような意見を誤りであり異端であると考えるべきである。○さらに、われわれの救い主およびその使徒たちは、聖書によれば、事物を所有していたが、それを使用する権利も、売ったり与えたり、利益を得る権利も持たなかった、と主張している者は、聖書にはっきりと言われていることに反対する。この主張は前提において誤っている。また、神の子、救い主がそのように行ったと見るものが聖書に反し、カトリックの教理の敵対者である。このように頑迷な主張を、今後、誤謬と考え、異端であると宣言する。」(9)

それにしても「売ったり与えたり、利益を得る権利も持たなかった、と主張している者は、聖書にはっきりと言われていることに反対する」とは、語るに落ちた言い草である。ヨハネス22世ほど売ったり買ったりしたがった教皇はいなかったのである。このような見解を勅書で示した教皇は、それまでに皆無であった。イエス・キリストの清貧は自明の如く称揚されていたのである。たとえば、教皇ニコラス３世の1279年８月14日付けの勅書 Exiit qui seminat の第２条に曰く、

「個人および共同の所有に対するすべての権利の放棄は功績となり聖なるものである。キリストは完徳の道を示して、言葉で教え、行動で証明したのである。」(10)

この見解は、1322年のフランシスコ会総会でも積極的に踏襲されている。1328年にエックハルトと同じく異端として告発されたフランシスコ会士ウイリアム・オッカムも、イエス・キリストの「すべての権利の放棄」を称揚する立場を採る厳格派であった。しかるに、その見解を教皇ヨハネス22世はひっくりかえしたのである。それは、彼の財に対する執着の強さに起因しよう。すなわち、ヨハネス22世にとって「事物の所有」、は最大関心事だったのである。このように見てくると、いささかセンセーショナルとも思えるピーター・デ・ローザの次のような言葉も、あながち一笑に付すわけには行かない。その著『教皇庁の闇の奥』においてデ・ローザ曰く、

「ヨハネ22世が教皇に就任したとき、金庫は空だった。クレメンス５世はありとあらゆる物を近親者に与えてしまっていたのである。ヨハネスは事態の立て直しにとりかかった。財政手腕に天分を発揮したこの教皇の原則は、教皇が与えることができるものなら、売ることができるというものだった。・・・。ヨハネ22世は金が必要だった。この教皇は戦争に、とりわけイタリア戦役に情熱を燃やしていた。歳入の70％を軍備に注ぎ込んだと算定されているが、それは聖ペテロの怒りとユリウス２世の嫉妬を掻き立てるに足るものだったろう。・・・。この歴代教皇の中でもっとも強欲な教皇は、その兄弟と甥には贅沢三昧をさせており、キリストの貧困という問題に関しては、前任教皇たちとは真っ向から対立していた。」(11)

デ・ローザを引くまでもなく、ヨハネス22世と同時代人である桂冠詩人ペトラルカも、ある友人への手紙の中で次の様に言っている。

「現在はフランスの地が私を捕えています。さらに、西方のバビロンと凶暴なローヌの流れが。このバビロンほど醜悪なものは天が下になく、そしてローヌ河はあの冥府の流れ、煮え返るコキュトスや恐ろしいアケロンもかくやと思わせるほどです。じっさい、ローヌのほとりで漁師たちの相続人が治めていますが、かつては清貧の徒であったのに、いまは完全にそのことを忘れているのです。かの漁師たちに思いを馳せ、そしてこの相続人たちを眼前に見れば唖然とします。――この連中は、黄金や華美な服装で身をつつみ、王侯や民衆からの収奪物を誇っています。そして（漁師たちの）裏返した小舟のかわりに、いま眼前には、豪奢な宮殿。小さな網のかわりに、城壁で囲いこまれた丘々（と居館）。かつてはその小さな網で、ガリラヤの炎暑のもとに、かろうじてわずかな食べ物をもとめ、その網でゲネサレ湖に夜通し働いても何も得られないことさえあったのです（しかしその翌朝は、イエスの名において、おびただしい魚が獲れました）。今は虚言が横行し、実のない文書が封印ひとつでペテンの網に変わります。そしてこの網で、同じイエスの名において、しかしそのじつ悪魔のしわざによって、軽信のキリスト教徒大衆が一網打尽にからめとられているのです。」(12)

ペトラルカの描写は、アヴィニョン教皇庁の財政強化のための事務手続きを、「実のない文書が封印ひとつでペテンの網に変わります」などと活写しており、当時の教皇庁の強欲さを暴いて余りがある。このように見てく

ると、ヨハネス22世がウイリアム・オッカムとマイスター・エックハルトを異端としたのは、決して偶然ではなかったと言えよう。

4　当時の教会体制批判を『カンタベリー物語』に探る

文学は、歪んではいるが時代を映す鏡である。そこで、上述の如きエックハルト当時の教皇庁の問題点を『カンタベリー物語』中の「免罪符説教家」の前口上の部分に探りたい。この前口上を読む時、エックハルトの時代とそう隔たってはいない時期の教皇庁の腐敗が如実に浮かび上がってくる。すなわち、ヨハネス22世から始まったいわゆる「アヴィニョン捕囚」もしくは「教皇のバビロン捕囚」は、グレゴリー11世（在位1370－78）が、ローマに帰還する1377年まで続いたのであり、ジェフリー・チョーサーが『カンタベリー物語』を書いたのは1387年から1400年にかけての頃だったとされるので、この物語に「アヴィニョン捕囚」期の教会世界の状況が反映していることは疑いない。その『カンタベリー物語』中の「免罪符説教家」の前口上に曰く、

「『皆さん』と免償説教家は言った。『私は教会で説教する時、堂々と熱弁を振って、説教を鐘のように朗々と響かせるように骨折ります。というのはすべて空でしゃべることができるからです。私の題目はいつも決まっているのです。昔から一つでした。《金銭を愛することはすべて悪の根である》というものです。まず最初に私はどこの出身であるかを述べ、それからローマ教皇様の勅書を一つ一つ見せますが、私たちの主人たる司教様の許可印章、それをまず見せます。わが身を守るためですよ。そうすればたとえ司祭であれ神学生であれ、だれもあえてキリストの神聖な仕事をする私の邪魔ができないでしょう（329行—341行）。こういう具合にして、免償説教家になりましてから、私は、毎年、百マルク稼ぎました。私は聖職者のように説教壇に立ちまして、俗人たちが座を占めますと、先ほどお話しましたように説教し、もっとたくさんの嘘八百を並べます（390行—394行）。貪欲とその悪についてが私の説教のすべてなのです。人々にお金を気前よく出させ、しかも特に私に対して出していただくためなのです。目的はお金を手に入れるためだけで、まったく罪の矯正のためではありません(400行—404行)」。(13)

いつも「金銭を愛することはすべて悪の根である」をテキストにして、「お金を手に入れるためだけ」に説教するとは、何というブラックユーモアであろうか。

ところで、70歳を過ぎて教皇となったヨハネス22世は、それまでの人生において雄弁な説教者であったという。貪欲に駆られたアヴィニョン時代のヨハネスに『カンタベリー物語』中の「免罪符説教家」の有様は重なり合う。チョーサーはヨハネス22世のような説教者を風刺しているとも言えよう。

結び

『カンタベリー物語』の「免罪符説教家」よろしきヨハネス22世の教会財政への異常な執着を念頭に置きつつ、異端審問にかかったエックハルトの言葉を検討する時、アヴィニョンの教皇庁が恐れたものは自ずから明らかであろう。ヨハネス22世当時の教皇庁は、徹底的「貧」を説くエックハルトの言説の、民衆への影響を恐れたのに違いない。それはもちろん、エックハルトの言葉が、当時の教皇庁の目論む財政強化の方針に著しく抵触したからにほかならないであろう。

思えば若き日にエアフルトのドミニコ会修道院に入って以来、エックハルトは教皇庁の傘の下で養われた人物であった。エックハルトは、長じてはケルン神学大学やパリ大学に学んだ後、ドミニコ会の管区長や修道院長、あるいはパリ大学教授を歴任し、やがてケルン神学大学学長兼、ドミニコ会修道院長を務めている。そのような地位と名誉を与えられたエックハルトが、ドイツ語説教第６番言うところの「財、名誉、安楽、快楽、益」の誘惑に常に激しく襲われていたことは想像に難くない。しかしエックハルトは、たとえばマタイによる福音書５章３節の「心の貧しい人々は、幸いである」というイエスの言葉を、己が命を懸けて読み、解釈し、説教したのである。その知識人としての態度は、大学学長及び修道院長としての己が実人生の基盤を管理している統括機関でもある教皇庁に闇雲に従うというものではなかった。それは、本論中でも指摘しておいたが、エックハルトの弁明書にあった次の言葉でもよく分かる。エックハルトは言っていた。まず、1326年９月26日の弁明から。

「私が異端であるなどと非難されたことはこれまでなかったし、（異端の）うわさが立ったこともなかった。このことは私の全生涯と私の教えが証明するものである」

次に1327年１月23日の弁明書から。

「私はいかなる信仰上の過ちも、いかなる不品行も、なしうるかぎり忌避してきた。このような過ちは私の学問的立場や聖職者としての立場と相容れないものであったし、これからもそうである。」

このように、エックハルトは、己が「学問的立場や聖職者としての立場」を意識する人間であった。それを意識した上でエックハルトは、マタイによる福音書５章３節のイエス・キリストの言葉を徹底的「貧」のすすめとして説教したのであった。エックハルトは、存在をかけてそのように説教したのであり、それに符合するかのように異端審問によって存在の危機に陥ったのである。それは極めて当然の成り行きであったろう。

最後に、エックハルトが当時の民衆から「学問の師(Lesemeister)」であると同時に「生の師（Lebemeister)」と

呼ばれていた点に言及したい。この言葉はFranz Pfeifferが1857年に出版した『ドイツ神秘主義』第二巻の597頁以下に収められているエックハルト伝承の中に出てくる。そこには次の様に言われている。

「このようにマイスター・エックハルトは言った。千人の学問の師よりも一人の生の師が良い。しかし、誰も神無しには学ぶことも生きることもできない(Ez sprichet meister Eckehart: weger were ein lebemeister denne tusent lesemeister; aber lesen und leben ee got, dem mac nieman zuo komen.)。」(14)

「生の師」とは何であろうか。生き方を教えてくれる人という意味であろうか。それなら、財を積む方法を身をもって教えていたヨハネス22世にこそふさわしい尊称であったであろう。しかし、「生の師」という言葉の真に意味するところは、別にあるであろう。民衆がエックハルトをLesemeisterと呼んだのは、エックハルトがその教えを講ずる(lesen)だけでなく、その語る言葉に命(Leben)をかけていることを彼らが看て取ったからではなかろうか。そして、民衆がエックハルトの言葉にそのような命を見出すことこそが、当時の教皇庁が恐れたものであったにちがいない。エックハルト当時のドイツの民衆は、エックハルトの知識人としての誠実さに「生の師(Lebemeister)」という尊称を捧げていたのである。

註

1 ドイツ語テキストは次の書物。Meister Eckehart Deutsche Predigten und Traktate Diogenes Taschenbuch; herausgegeben und ubersetzt von J. Quint, Diogenes, 1979, p.451. ラテン語テキストとドイツ語テキストは以下の如し。Qui non intendunt res nec honores nec utilitarem nec devotionem internam nec sanctitatem nec premium nec regnum celorum, sed omnibus hiis renuntiaverunt, etiam quod suum est, in illis hominibus honoratur Deus.(Die nach nichts trachten, weder nach Ehren noch nach Nutzen noch nach innerer Hingabe noch nach Heiligkeit noch nach Belohnung noch nach dem Himmelreich, sondern auf dieses alles verzichtet haben, auch auf das, was das Ihrige ist, - in solchen Menschen wird Gott geehrt.) 訳は次の書物。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集第6巻エックハルトⅠ』教文館、1989年、396頁。

2 Meister. Eckhart, Deutsche Werke. Band 1, W.Kohlhammer Verlag, 1986, S.100. 訳は次の書物。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集第6巻エックハルトⅠ』教文館、1989年、38頁-40頁。ドイツ語テキストは以下の如し。Gottes ist die Ehre. Wer sind die, die Gott ehren? Die aus sich selbst gänzlich ausgegangen sind und das Ihrige ganz und gar nicht suchen in irgendwelchen Dingen, was immer es sei, weder Großes noch Kleines; die auf nichts unter sich noch über sich noch neben sich noch an sich sehen; die nicht nach Gut noch Ehre noch Gemach noch Lust10 noch Nutzen noch Innigkeit noch Heiligkeit noch Lohn noch Himmelreich trachten und sich alles dieses entäußert haben, alles Ihrigen, —von diesen Leuten hat Gott Ehre, und die ehren Gott im eigentlichen Sinne und geben ihm, was sein ist.

3 Meister. Eckhart, Deutsche Werke. BandⅡ, W. Kohlhammer Verlag, 1986, S.488. 訳は次の書物。マイスター・エックハルト著、田島照久編訳『エックハルト説教集』、岩波書店1990、163頁。

4 Meister. Eckhart, Deutsche Werke. BandⅡ, W.Kohlhammer Verlag, 1986, S.502. 訳は次の書物。訳は次の書物。マイスター・エックハルト著、田島照久編訳『エックハルト説教集』、岩波書店、1990、172頁。

5 Kurt Ruh, Meister Eckhart Theologe, Prediger. Mystiker, C.H. Beck, 1985, p.179.
G. Thery, Archives d'histoire doctrinale et litteraire du moyen age, Paris, 1926-1927, p.185. 訳は註5と共に次の書物を参照した。ゲルハルト・ヴェーア著. 徳岡知和子訳『評伝マイスター・エックハルト』、新評社、1999年。

6 Bernard McGinn,The mystical thought of Meister Eckhart The man from whom God hid nothing,The Crossroad Publishing Company, 2001, p.15.
G.Thery, Archives d'histoire doctrinale et litteraire du moyen age, Paris, 1926-1927, p.186。

7 Kurt Ruh Meister Eckhart Theologe, Prediger, Mystiker, C.H. Beck, 1985,。
『悪の意味』新教出版社218-229

8 久保正幡先生還暦記念出版準備会編『西洋法制史料選Ⅱ中世』、創文社、1978、341頁

9 H・デンツィンガー編A・シェーンメッツァー増補改訂、浜寛五郎訳『カトリック教会文書資料集信経および信仰と道徳に関する定義集. 改訂4版』、エンデルレ書店、1992、209頁

10 H・デンツィンガー編A・シェーンメッツァー増補改訂、浜寛五郎訳『カトリック教会文書資料集信経および信仰と道徳に関する定義集. 改訂4版』、エンデルレ書店、1992、209頁-210頁)

11 ピーター・デ・ローザ著、遠藤利国訳『教皇庁の闇の奥：キリストの代理人たち』、リブロポート, 1993.、426頁-427頁

12 ペトラルカ著、近藤恒一編訳『ルネサンス書簡集』、岩波書店、1989、221頁-222頁

13 ジェフリー・チョーサー著。笹本長敬訳『カンタベリー物語(全訳)』、英宝社、2002、267頁-268頁

14 Bernard McGinn,The mystical thought of Meister Eckhart The man from whom God hid nothing, The Crossroad Publishing Company, 2001, p.1

(本稿は、2007年9月14日㈮から15日㈯にかけて恵泉女学園大学を会場として行われたキリスト教史学会第58回大会における発表論文に加筆訂正したものである。)